

[3]

氏名	ZHAN YING
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	文博第276号
学位授与の日付	2021年9月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Family language policy in early language acquisition: A longitudinal case study of an English-Japanese-Mandarin trilingual child
論文審査委員	主査教授 フレッド・アイナー・ アンダーソン 副査教授 陶 徳民 副査教授 山住 勝広 専門審査委員 野口 メアリー（元関西大学教授）

論文内容の要旨

本論文は、トライリンガルな子供の幼児期における3言語（英語、日本語、中国語）同時獲得の質的なケーススタディーである。タイトルは、Family language policy in early language acquisition: A five-year case study of an English-Japanese-Mandarin trilingual childである。日本語に訳すれば、「幼児期言語獲得における家庭言語政策の役割～5年間を通して英語・日本語・中国語のトライリンガル子供のケース・スタディ」。言語政策論（language policy）及び家庭言語政策（family language policy）を応用しながら5年間に渡った観察日記、録音録画などによるデータ収集を行い、詳細に分析した。論文は英語で執筆、長さは66,000語を超える。総枚数は270ページで、9章に分かれている。

第1章 Introductionは、執筆者の研究目的とバックグラウンドを説明し、第2～9章の概要を紹介する。

第2章 Language policyは、研究の背景になる一般言語政策論に関する多くの文献を要約する。特に、社会言語学者 Bernard Spolsky が提案した言語政策における three components（三要素）である language ideology（言語イデオロギー）、language practices（言語実践）、language management（言語管理）を紹介し、本研究との関わりを明確にする。

第3章 Family language policyでは、執筆者が第2章で紹介した論をマルチリンガル言語発達との関係に照らし合わせ詳らかにする。具体的には、Spolskyの three componentsを適用した研究者 Elizabeth Lanza が展開した新分野である family language policy（家庭言語政策）を紹介しながら、執筆者のケース・スタディに応用した。幼児期において家庭

内で親主導の元話される多言語使用が family language policy における基盤である。

第4章 (Methodology) では、執筆者が行ったケース・スタディのデータ収集法及びデータ分析法を詳細に説明。データは5年間(1歳～5歳)に渡った観察日記と数多くの録音録画により収集され、家庭言語政策論を基礎とし執筆者が談話分析法などを用いて詳細に解明した。家庭内では母親(中国語母話者)が中国語を使用し、父親(日本語母話者)が原則として英語を使用し、家庭外環境では日本語使用を家庭言語政策とした。

第5章 (Findings: The family members' language ideologies) と第6章 (Findings: Language practices in the trilingual home) は執筆者が収集したデータを Spolsky と Lanza の言語政策(家庭言語政策)論における三要素の中の二つ(language ideology と language practices)を中心に分析。第5章ではトライリンガルイズムに関する親と子供の態度、子供の言語意識、子供の三言語での能力上達とその言語能力とアイデンティティ感覚の関連などを探る。第6章では、親と子供の家庭内外での実際の言語使用が取り上げられ、例えば、子供に言語が理解されやすいようにするための親のモデリング、全体的な意味を明確にするための code-switching (同じインタラクションの中で複数の言語を使うこと) や translating (使用言語間で同じ発話を翻訳すること) などを詳細的に分析。

第7章 (Findings: Parent supporters and child manager) は、マルチリンガル言語獲得家庭言語政策における子供のエージェンシー(子供側からの言語実践と言語交渉)をデータ参照で重点に置く。そのエージェンシーを実践するための一面として、子供が時々観察者と被観察者の立場を自発的に入れ替え、自分が「先生」の役割を担い、母語ではない言語(例えば、母親の場合日本語、父親の場合中国語)を親に教えるという逆転の任務を得た。子供のエージェンシーを考えた上で、家庭言語政策づくりは親だけの責任で行われるのではなく、親子双方の共同役割に変わる。

第8章 (Discussion and issues beyond family language policy) は、家庭言語政策と直接の関連が見られなくても、マルチリンガル言語発達における重要な意義がある点をいくつか取り上げる。特に、子供が言語学的に繋がりのない三言語を使用するときの文法や語彙の cross-linguistic influence (言語転移) のことである。

第9章 (Conclusion and further research possibilities) では、執筆者が論文の研究考察を振り返りながら、今後展開する研究継続を計画。主に、研究対象の子供が日本の小学校入学後、新しい「モノリンガル」な環境下で勉強をした場合における、識字を含むトライリンガル維持についての研究を考えている。

論文審査結果の要旨

主査、副査、専門審査員は、全員本論文を高く評価した。特に、長期的なデータ収集によるトライリンガル言語獲得研究は今まで世界的にも非常に少なく、本論文調査対象とした三言語(英語、日本語、中国語)の組み合わせは審査員たちが知っている限り初めてであり、

言語獲得・習得に関わる分野において貴重な貢献をされると思われる。

他、審査員が以下のことを有意義な点として挙げた：

- 執筆者が論文のプレゼンテーションにおいて各章の内容を明確に示し、本研究で新しい発見についても判然とさせた。
- 本論文はトライリンガル獲得研究を以下に挙げる三つの点において発展展開させた：
(1) これまでの多言語獲得研究と比べ、長期にわたり掘り下げた調査。(2) これまでのトライリンガリズムの研究と違い、対象三言語におけるコミュニケーション能力発達のみならず、識字能力にも焦点を当て詳細に調べた。(3) 言語政策分野に関して執筆者は、親のチョイス、社会的影響、子供のエージェンシーなどこれまでの研究が取り上げていない見解分析を多数導入した。
- 本論文では、エスノグラフィックなデータの綿密な分析とならび、理論的・方法論に優れた成果が達成されている。そのうちのひとつは、家庭言語政策の構築プロセスに関して焦点となるデータの分析に、子どもの「エージェンシー」という理論的概念を援用している点である。この概念を分析のツールとすることによって、本論文は、家庭言語政策の構築に影響する、親によるトップダウンの意思決定や行為遂行だけでなく、子どもの「エージェンシー」の発揮による影響をとらえることに成功している。ここでいう「エージェンシー」は、子どもの側からの言語実践や言語交渉に対するボトムアップの影響力の行使と考えられている。
- こうして、本論文は、マイクロ、マクロの両方の次元において、家庭言語政策の形成と発達に対する親主導の一方向的かつリニアな介入のあり方を克服するものとなっている。こうしたリニアな介入は、通常、行為者の生き生きとした生活活動とは切り離されたものとしてある。本論文は、この一方向的かつリニアな介入のあり方を超え、家庭が自分たち自身の言語政策を生み出すために本質的な役割を果たす、子どものエージェンシーと創造性に焦点化し、その生成を明らかかにしている。本論文の第7章 ‘Parent supporter and child manager’ では、子どもが、multilingualismに対する親の信念や実践と交渉したり競合したりして、それらを再定義していく、いわば自己介入、自己教育という agentive な姿が、データの綿密な分析を通して見事に示されている。
- また、本論文における子どものエージェンシーの概念化は、家庭におけるメンバー間の協働の意思決定や環境の再定義・転換といった集団的な次元をとらえるものとなっている。これは、従来の伝統的なエージェンシー概念が個体主義的なものであることを超え、エージェンシーの集団的・協働的な性質を拡張的に理論化していくことでもある。本論文では、こうして、家庭言語政策の創造が、家庭における集団的・協働的な言語活動のコンテキストにおいて分析、解明されている。つまり、家庭自身が自分たちの家庭言語政策の構築に協働的に介入し、その構築を主導し、責任を共有していることが、本論文において新たに発見され、明確化されている。この構築プロセスにおいては、家庭のメンバーそれぞれの集団的・協働的なエージェンシーと呼べるものが拡張的に形成されている。つまり、本論文は、家庭言語政策の形成と発達が、他な

らない家庭の集団的創造性を通して立ち現れてくることを、データの緻密な分析によって発見したものなのである。

タイプミスなどの誤りが見つかり、研究対象児の中国語発話に関して英訳の適切さに疑問もあったが、執筆者はその点を認め、今後の修正版に訂正案を取り入れる姿勢を示した。

しかしながら、審査員のフィードバックは非常にポジティブであり、内容を学術雑誌や書籍出版のために準備することを勧めた。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。